

9月3日（火）

コミュニティ施設（ボイド）視察

メルボルン市初の総合コミュニティ・サービス・スペースとして昨年7月に開設した、コミュニティ施設「ボイド」を視察した。



コミュニティ施設「ボイド」入口にて

最初に、1階のラウンジにて施設の概要やサービス内容について説明を受けた。

本施設は地域の文化拠点として、コミュニティ活動を強化するため、文化遺産にも登録された女子高等学校を造り替えて建てられた施設であり、図書館やカフェ、会議室、芸術家向けのクリエイティブスタジオなどを備えている。また、小さい子供や子育て中の親のためのファミリーサービスや、母乳で育てている母親向けの健康サービスを実施するほか、市民向けサービスの情報や無料wi-fiサービスを提供するなど、多様な市民ニーズに対応している。

施設ができた背景として、この施設のあるサウスバンク地域は住宅地として発展中であり、さまざまな世代の方が移り住んできた。また、新しく来られた移民の方も多数生活されており、多様な住民が屋内・屋外で参加できるスペースが必要であった。また、住民の60%近くが20歳～34歳の方々であるなど若い家族が増加しており、これら若い家族向けのサービスも必要であった。そこで、ディベロッパーとコミュニティ・ビジネスとの合意により、ボイド施設やコミュニティパークのほか、200戸のアパートを作ることとしており、今なおこのエリアは開発中である。

ボイドはオープンして1年になるが、地域の人が集まる場所として多くの方々に多岐にわたり利用されている。例えば、この1年間で、図書館の利用者は5万人超、子供向けのプログラムの利用者は3千人以上、妊産婦や新生児向けのサービス利用者は

445件である。また利用者のほとんどが複数のサービスを利用しており、保護者の84%が何らかの形で活動に参加している。最近では、本の発表会や詩の読み聞かせなどのプログラムを保護者みずからが自主的に作成してくれるようになり、非常にうれしく感じている。姉妹都市からの訪問は初めてであり非常にうれしく思う、との説明があった。



説明聴取後、施設見学を行った。1階にはラウンジのほか、カフェやミーティングルーム、プレイルーム、図書館を備えている。ミーティングルームでは小さな子供向けのプログラムの最中であり、一行はその様子を見学した。カフェに関しては、単なる役所のコミュニティ施設だけではなく、交流の場としても必要であるとの考えのもと、民間業者が運営している。

1階プレイルームでのプログラムを視察

2階には、妊産婦や小さな子供を育てる母親向けの個別のカウンセリングルームが3部屋あり、有資格者が常駐している。また、アーティスト向けのレンタルルームがあり、芸術を志す方が2年契約でレンタルしている。

施設全体を通じて、さまざまな世代の住民が多岐にわたり交流できるような工夫が施されていることを実感した。



アーティストとの交流

再開発地区（ヤラ川・ドックランズ）視察

ドックランズは、メルボルン市の西側、ビクトリア・ハーバーに面したウォーターフロントにおける全豪最大級の都市再開発プロジェクトである。2000年から2009年までの第1期は都市開発事業が中心に行われ、2010年からの第2期は公園などの地域社会事業を中心に開発が行われており、今なお大規模再開発が進行中である。現在は、高級マンションや大企業のオフィスビルが立ち並ぶほか、景観や環境にも配慮されており、ロケーションとも相まってメルボルンの一大名所となっている。

最初に、ヤラ川を下ってドックランズに至るまでの間、クルーズ船に乗り、ヤラ川沿岸の状況を視察しながら、再開発の概要について説明を受けた。

メルボルンの港は、ヤラ川の川幅が少し広がっているクイーンズ・ブリッジのところに当初あったが、船の大型化に対応できるようドックランズに港を作った。しかし、より大型の貨物船に対応できるよう、1980年代にさらに河口側へ移動した。つまり、小型の港→中型の港→大型の港と3段階で移動したことになる。

ドックランズの再開発は2000年に始まり、2007年の7月にビクトリア州政府の直轄地からメルボルン市の管轄となった。これまでに、本事業に対し60億ドル以上が投資されている。現在は7,000人以上の住民が住んでおり、29,000人の労働者がこの地域で働いている。

特徴として、デベロッパーは建物を建てるだけでなく、周囲の公共インフラの整備も含めて担当しており、建物周辺の通りや水辺までの一区画の開発を担当している。また、公的資金と民間投資の比率の平均は1:38程度となっているが、土地売却価格を下げることにより、安い価格で買い取ったデベロッパーが自ら投資しやすい仕組みとしている。ドックランズ全体で10のデベロッパーが応募したが、それぞれが住宅や商業施設、コミュニティ関連の施設を整備するように奨励されている。



ビクトリア湾にて

再開発に当たっては、55,000人の収容が可能である多目的スポーツ広場（エティハド・スタジアム）を公的資金で建設し、これを起爆剤としてスタートさせた。現在、エリアの東側はほぼ完成しているが、西側の未利用地の開発が終了するまでに、あと10年にかかる予定である。また、ドックランズは持続可能な形、環境にやさしい形を志しており、その一環として、新しいヨーロッパの技術である「木材をラミネートした材料」を利用したビルを建設している。この技術には、ドックランズの最大の開発事業者であるレンド・リース社と市が関与しているが、我々はこの工法に非常に興味を持っている。その理由は、コンクリートに比べて重量が軽いため、基礎工事のコス

トをカットできるからである。そのほか、再開発に当たっては、アート作品をたくさん採り入れることが奨励されている、との説明があった。

【質疑応答 要旨】

○下水道や道路等のインフラ整備の費用負担は。

→デベロッパーが負担し整備している。

○土地の売却価格を下げたことによるデベロッパーの費用負担は。

→インフラ整備はデベロッパーが負担するが、図書館やコミュニティ施設等の費用は市が負担している。

ビクトリア湾に到着後、徒歩にて、ドックランズ再開発における最大のデベロッパーであるレンド・リース社に移動し、開発の概要について説明を受けた。



レンド・リース社は開発に携わって10年目であり、35万㎡の商業開発を担当している。そのうち商業施設の面積は4万1千㎡であり、コリンズストリーのトラムの終点があるなど、交通至便な位置にある。商業ビルのほとんどが環境に配慮したファイブスターのビルであるほか、地域全体として環境に配慮している。

レンド・リース社にて説明聴取

開発エリアには、130名の受け入れが可能な託児所や、1万5千人程度いる通勤者向けのコンビニエンスストア等の小型店舗も建てられている。また、図書館が今年12月に完成する予定であり、その隣には、メルボルン市との協力のもと、新生児と母親のための施設を作っている。

デベロッパーとして前向きに捉えていることは、単なるインフラ投資だけではなく、コミュニティ施設を建設することにより地域社会に参画できることが嬉しいと感じている。住民に安心感を持っていただける開発をしたいと考えており、そういった面でもメルボルン市と協調して開発していきたい、との説明があった。

【質疑応答 要旨】

○公的交通機関の整備状況は。

→今年の12月までに市電（トラム）が走る予定である。

○メルボルン市当局の規制が強いと感じることはないか。

→行政と開発業者がパートナーシップをもって取り組むことが何よりも重要で

あると考えており、目的の達成のためにルールがあると互いに共通認識している。開発に当たっては基準が必要であり、双方の間で価値を共有することが重要であると認識している。

その後、ラミネート木材を利用して初めて建てられたアパートメントの視察を行った。

建物建設の際の基盤工事のコストダウンを行いたいと考え、このような工法を採用した。リフトのシャフトまでもが木造であり、現在 16 所帯分が完成している。建築コストについては、現時点では従来と変わらないが、この建て方に慣れてきて効率が上がれば、コストは下がってくると考えている。また、建築期間は約 30%短縮できると考えている、との説明があった。

【質疑応答 要旨】

○建物の耐久年数は。

→デザインタイプにもよるが、100 年間は維持できるように建築している。

○主な購買層と購買理由は。

→50%は市民が居住用のため購入し、残り 50%は投資家が投資目的のため購入している。

姉妹都市提携 35 周年記念植樹式

さわやかな小春日和のもとキングス・ドメイン公園内で記念植樹式が行われた。ケビン・ルーイ議員をはじめメルボルン市の関係者がたくさん参加された。



ケビン・ルーイ議員との植樹式

ケビン・ルーイ議員は、前メルボルン市長の市長室長をされていた。姉妹都市提携 30 周年となる 2008 年には、前市長の来阪時に市長室長として随行されたほか、大阪市代表団が前回メルボルンを訪問した際には、代表団の受け入れを担当されるなど、大阪市とも非常に関係の深い議員である。

また、記念植樹の木は大阪にも馴染みの深い「イチョウの木」で

あり、大阪とメルボルンの友好関係が末永く続くことを祈念していとのことであった。

最初に、ルーイ議員、村上副市長、美延市会議長の3人が、続いて、代表団のメンバー全員が順番に記念植樹を行った。大阪市とメルボルン市の絆や友情を土台にして、イチョウの木を育むがごとく両市の関係を育み、友好関係が末永く続くことを祈念し、植樹式は終了した。



ケビン・ルーイ議員との植樹式

姉妹都市提携 35 周年記念夕食会

エポカレストランにて、メルボルン市役所主催の夕食会が行われた。

メルボルン市CEOとして活躍されているキャシー・アレクサンダー氏の司会のもと、公務により急遽欠席となったロバート・ドイル市長からのメッセージをご披露いただき、続いてスーザン・ライリー副市長、村上副市長、美延市会議長から挨拶を行った。

【ドイル市長 メッセージ要旨】

我々は大阪市との姉妹都市関係を非常に誇りに思っている。大阪とメルボルンの多様な交流が、オーストラリアと日本の強い関係づくり・相互理解に貢献してきたと考えている。時には双方で意見が異なることもあったが、意見をぶつけ合うことも友情の一部と互いに理解して、解決してきたと自負している。

35周年記念事業に出席できないことは、非常に申し訳なく、また残念に思う。急遽、C40（世界大都市気候先導グループ）会議における市長講演の依頼を受け、出席することになった。

来年の3月には市民・ビジネスの代表団を大阪に送る予定にしている。私も同行させていただき、皆様とディスカッションできることを楽しみにしている。

【ライリー副市長 挨拶要旨】

大阪との姉妹都市提携が 35 周年を迎えたが、大阪はメルボルンにとって姉妹都市関係の第 1 号である。また、大阪市のご尽力で B P C（ビジネスパートナー都市：アジア太平洋地域における経済ネットワークを構築するための都市提携【香港、シンガポール、クアラルンプール、マニラ、ジャカルタ、ソウル、上海、ホーチミン、ムンバイ、メルボルン、天津、オークランド、大阪の 13 市】）の一員となることができ、地域のパートナーとの絆を強くすることができたことに感謝している。

5 年前の 30 周年記念以降も、いろいろな事があった。まずは、メルボルン・大阪デザインマップ、これはデザイナー達が集まり名所等をマップ化したものである。そして、毎年メルボルンで行われる「日本の夏祭り」、この祭りには 1 万人の方が集まる。また、災害管理の公開セミナー。そして、私のお気に入りの一つでもあるメルボルン・大阪のヨットレース。さらに、2013 年にはバイオテクノロジー分野での未来のリーダーのための交流会が行われた。

長い関係の中で、良いことも悪いこともあったが、お互いに理解を深めてきた。そして、深い尊敬に基づいた正直で飾らない関係を享受してきた。今後も互いに協力していく機会が必要と考えており、2014 年 3 月に大阪を訪問したいと考えている。

【村上副市長 挨拶要旨】

大阪市とメルボルン市が姉妹都市という固い絆で結ばれ 35 年の月日が流れた。この節目の年に「世界で最も住みやすい都市」にランキングされているすばらしい環境を見せていただけることを心からうれしく思う。

また、両市の友好関係が末永く続くようイチョウの木を植樹し、今後の交流の進展に向けて思いを新たにしたい。

メルボルン市との関係は、姉妹都市やビジネスパートナー都市のほか、姉妹校交流や中学生国際交流事業など若い世代の交流も多く、素晴らしいパートナーとしてこれからも緊密な関係を築いていきたい。今回の訪問を機に、両市の友好関係が深まることを祈念する。

【美延市会議長 挨拶要旨】

大阪とメルボルンで積み重ねてきた交流が 35 周年を迎えたことは非常に意義深く大変うれしく思う。これも、両市の市民の熱意と努力の成果であり、深く感謝するものである。

とりわけ、将来を担う若い世代の交流や市民レベル交流が重要と考えており、若者の交流が活発に行われていることを大変うれしく思う。

話は変わるが、大阪では、宴席の終了時に、無事に終了できたことを参加者に感謝する意味で「大阪締め」というものを行っている。日本文化に触れていただく、また

皆様との友好関係を深めるために、大阪締めを最後に行うので、ご参加の皆様のご協力をお願いします。

挨拶終了後、待場議員の乾杯と続き、代表団メンバーとメルボルン市会議員の間でそれぞれ記念品交換を行うなど、終始和やかな雰囲気の中で夕食会が行われた。最後に、奥野議員の発声のもと出席者全員で大阪締めを行い、両市の友好関係が今後も末永く続くことをお互いに確信して夕食会が終了した。



記念品の交換



出席者全員で大阪締め